

研究報告

『一握の砂』発刊百年後の北海道と盛岡

水野 信太郎

北翔大学 生涯スポーツ学部 スポーツ教育学科

抄 録

本稿は発刊されて100年目を迎えた歌集『一握の砂』を記念して、平成22年（2010年）12月1日に岩手県盛岡市内で開かれた催事に参加した研修報告である。『一握の砂』は明治43年（1910年）12月1日に発刊された日本近代文学史に残る短歌集である。作者の石川啄木（いしかわ・たくぼく、1886-1912）は岩手県出身の著名な歌人・詩人であるが僅か26歳で夭折する。彼の生前の主な職業は、小学校に勤める代用教員と新聞社の記者・編集者・校正係そして投稿歌壇の選者であった。

啄木の文学者としての成長に欠かすことが出来ない経歴が、明治40年5月から翌41年4月までの北海道における1年間である。その意味で石川啄木ゆかりの土地は、ふるさと盛岡と北海道そして帝都・東京である。没後99年を経た啄木であるが、ゆかりのある各都市では今日もまちづくりに彼の作品や足跡が活用されている。本研修報告は「歌集『一握の砂』発刊100年記念パーティー」の内容だけでなく、北海道内と盛岡市における近年の新しい動きを含めてレポートするものである。

キーワード：石川啄木、小樽、札幌、洪民、まちづくり、全国町並みゼミ

I. はじめに

本稿は、明治43年(1910年)に発刊された『一握の砂』が、平成22年(2010年)12月1日(水)にちょうど百年目を迎えた事に関するレポートである。歌集『一握の砂』は、明治時代を代表する歌人の一人であった啄木・石川一(たくぼく・いしかわ はじめ、1886-1912)の第一歌集であり、彼の生前に出版された唯一の短歌集であった。その初版発行日は明治43年(1910年)12月1日である。

同歌集は、これまで幾箇所かの文学関係・研究機関によって復刻されてきた。たとえば本学図書館および当研究室の手元にある版だけでも、昭和59年7月1日の時点で第25刷を数えている『新選 名著復刻全集 歌集 一握の砂 石川啄木著 東雲堂版』を一例として挙げることができる。また『石川啄木記念館 名著復刻シリーズ 石川啄木著 一握の砂 東雲堂版』は財団法人石川啄木記念館が企画・編集し、同記念館が発行したものであるが、平成15年2月20日に第1刷を出している。続けて同16年4月13日に第2刷、19年10月27日第3刷、そして平成22年(2010年)12月1日に第4刷が復刻された。この第4刷の日付が明治43年から数えて、ちょうど100年目

の同じ月日である。

上記のような歴史的経緯の中で、このたび「歌集『一握の砂』発刊100年記念パーティー」が開催された。本稿の内容は、その催し物を中心として、その時期と前後する関連事項を記述する研修報告である。

II. 石川啄木とその作品

石川一(いしかわ・はじめ)は岩手県南岩手郡日戸村の日照山常光寺において、工藤カツ(のち石川かつ、1847-1912)の長男として明治19年(1886年)2月20日に生まれた。父親は常光寺の第22代住職であった石川一禎(いしかわ・いってい、1850-1927)である。一禎とカツの間には長女・サダ(のち田村さだ、1876-1906)、次女・トラ(のち山本とら、1878-1945)、長男・一、そして三女・ミツ(のち三浦光子、1888-1968)の一男三女があった。

一家は明治20年(1887年)の春に、岩手県北岩手郡洪民村にある萬年山宝徳寺へ転住する。一禎が同寺の第15代住職となるためであった。常光寺も宝徳寺も、曹洞宗(そうとうしゅう)の禅寺である。この2番目の仏寺が、のちの啄木にとっての家であり、洪民村が「ふるさと」

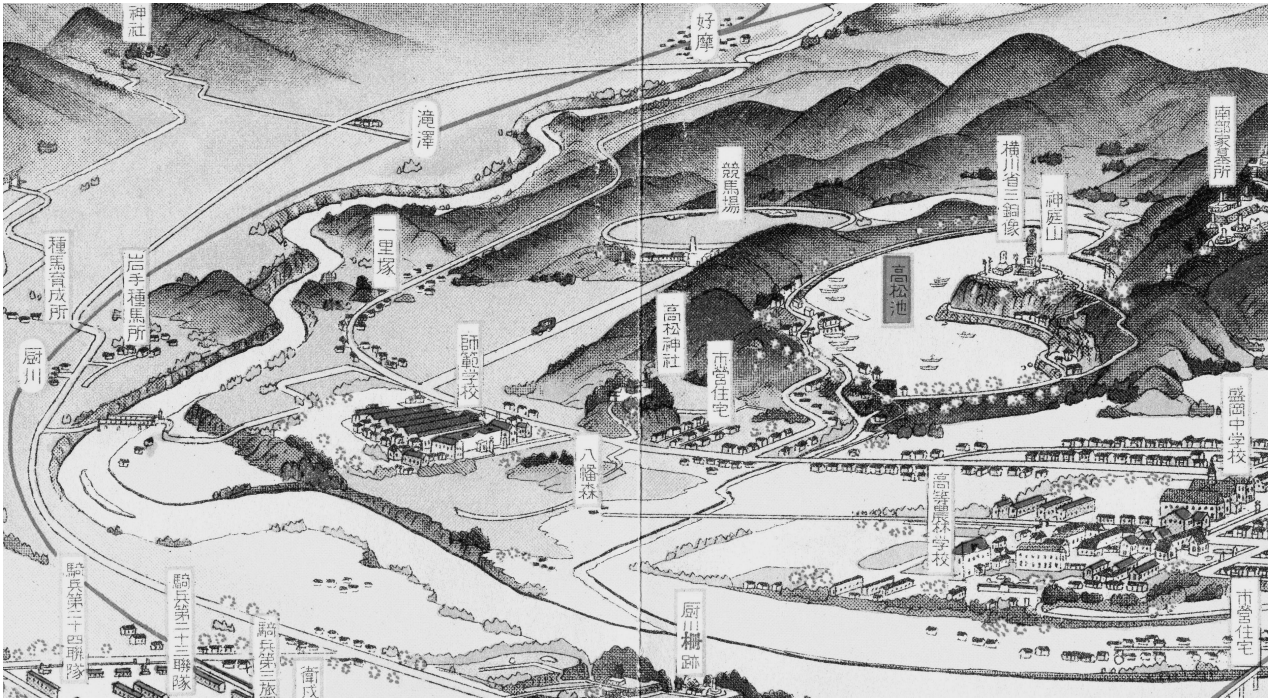


図-1 盛岡と渋民の鳥瞰図 (吉田初三郎)

となる。ふるさと渋民村の最寄駅は、東北本線の好摩（こうま）駅であった。啄木時代ではないが第二次世界大戦以前の「好摩」駅周辺の位置関係を描いた鳥瞰図を図-1に示す。

彼は明治24年(1891年)5月2日、地元の岩手郡渋民尋常小学校に入学し、同28年(1895年)3月に卒業する。翌月の4月2日、盛岡高等小学校に入学。この時から彼は盛岡市内に居住するようになる。そして明治31年(1898年)4月には岩手県盛岡尋常中学校に合格し、25日に入学した。同校の先輩に花明・金田一京助(かめい・きんだいち きょうすけ, 1882-1971)や胡堂・野村長一(こどう・のむら おさかず, 1882-1963)ら後年の文学者たちがいた。

しかし明治35年(1902年)10月には、最終学年まで進級・在籍していた中学校を中途退学してしまう。このときの判断が後年まで影響して、彼は生涯にわたり特に金銭面での苦労を強いられ続けることとなる。学校を中退した啄木は翌月の早々には東京にあって、文学で志を遂げようとする。そして11月10日には渋谷時代の新詩社に、鉄幹・與謝野寛(てっかん・よさの ひろし, 1873-1935)・晶子(あきこ, 1878-1942)夫妻を訪ねている(写真-1および2参照)。

ところが在京生活で肉体をこわしてしまい、明治36年(1903年)2月27日には父に伴われて帰郷する。そして郷里の渋民村にあって同年12月1日に、はじめて啄木の筆名による詩が『明星』に掲載された。翌37年(1904年)1年間は啄木の名で作品を各誌に寄せる。したがって平成

22年の12月1日は「啄木」というペンネームが誕生してから、ちょうど107年目でもあった。

明治38年(1905年)5月3日に詩集『あこがれ』を東京から出版。一方でこの時、彼は旧姓・堀合節子(ほりあい せつこ, 1886-1913)と結婚し、6月4日から盛岡市内で新婚生活を始める。渋民村の宝徳寺を追われた両親と妹が一緒であった。この「新婚の家」は盛岡市の旧所在位置のまま今日なお保存されている。同年の6月25日には市内、加賀野の一軒家へ家族で転居。この場所で文芸雑誌『小天地』を9月5日に自ら発刊するが、1号を出しただけで行き詰る。

生活に困窮した結果、明治39年(1906年)3月4日ふたたび渋民村へ帰る。母と妻と共に齊藤家の借家で暮らし始めた。この直前の2月25日に長姉・田村サダが没している。4月11日、岩手郡渋民尋常高等小学校代用教員。この年の12月29日には長女・京子(きょうこ, 1906-1930)が誕生する。京子は渋民ではなく、盛岡市内の堀合の実家で生まれた。

ふるさとでの教師生活も長続きせず翌40年(1907年)5月5日、小樽へ行く途中の妹・光子を伴って函館に単身到着。あわただしい北海道での暮らしが始まる。この離郷が啄木にとって最後の渋民であった。9月14日札幌、同月27日小樽、翌明治41年(1908年)1月21日釧路着と、彼は道内を奥へ奥へと押し流されていく。結局どの土地にも落ち着くことは出来なくて、明治41年4月24日に東京へ向かって函館を船で一人出発。後年に啄木一家の墓が建てられる函館との最後の別れであった。ちなみに彼

の職業としては、函館の地で商業会議所の事務職や小学校の代用教員なども一時は勤めるが、1年間におよぶ北海道時代の主要な仕事は新聞記者であり紙面の編集者であった。

明治42年(1909年)1月1日、編集作業をした『スバル』が創刊された。3月1日東京朝日新聞社の校正係として就職。それまで函館で待たせていた母・妻・長女が6月16日に上京し、本郷区弓町の喜之床という理髪店の2階に家族で住む。この「本郷喜之床」は現在、愛知県犬山市の博物館明治村へ移築して保存されている。

明治43年(1910年)10月4日に長男・真一が生まれるが、その月の27日には死んでしまう。そして本稿の主題である歌集『一握の砂』が発刊されるのが、この年の12月1日であった。

明治44年(1911年)2月4日、東京帝国大学付属病院の青山内科に入院。入院時の診断は、慢性腹膜炎であった。その日の夕刻に診察をした有馬英二(1883-1975)は、のちに北海道帝国大学医学部附属病院の初代院長となる医師である。3月15日になって退院するが、以後は療養生活が死の床まで続くこととなる。肺結核に移行していく。8月7日、2階への昇り降りが負担となったので、これを解消するため小石川区久堅町の平家(ひらや・1階建)に転居、これが終(つい)の住まいとなる。

明治45年(1912年)3月7日、母・カツが結核のため死去。そして啄木自身も4月13日に没した。彼の死後のことになるが、この年の6月14日に次女・房江(ふさえ、1912-1930)が生まれ、同月20日には第二歌集『悲しき玩具』が出版された。

以上が石川啄木誕生から没年の翌年までの出来事である。このように見てくると平成22年は啄木の第一歌集『一握の砂』発刊100年目であっただけでなく、彼が死去して98年目の年でもあった。

Ⅲ. 啄木研究とその成果

石川啄木研究は、すでに相当の学問的な積み上げを見せている。その成果の代表例として、啄木存命中の大半の動きが詳細にわかっている点を挙げることができる^{註1)}。明治何年の何月何日には啄木がどこのまちに暮らしながら、勤務先からの収入がどれほどであるのに対して、いかほど貧しい日々を過していたのかなどが、ほぼ知られている。それだけでなく彼と多少なりとも関わりをもった人物に関してさえも、種々の研究論文や書籍類によって公表されてきた。

啄木自身のことについては『回想の石川啄木』^{註2)}がよくまとまっている。また青少年期以降の啄木像として

は、同級生の目を通して観察した『人間啄木』^{註3)}が重要な証言集となっている。そして先輩の立場である金田一京助は『定本 石川啄木』^{註4)}という重要な書籍を著した。また生前の当人に会うことは一度もなかったものの、唯ひとりの娘婿として『父啄木を語る』^{註5)}をまとめた石川正雄(いしかわ まさお、1900-1968)もいる。

啄木作品を探るために石川啄木本人について知ろうとするだけでなく、かれの周囲にいた人物を調査するという研究の手法は古い。昭和4年に発行された『啄木を繞る人々』^{註6)}などは、昭和初年の好例といえよう。加えて啄木作品中に歌われた人物像を特定しようとする試みも続けられてきた。『啄木の歌とそのモデル』^{註7)}は太平洋戦争開戦直前の昭和16年に初版が発行されている。

石川啄木の家族も調査対象とされ、その結果詳細な研究の成果が公にされている。『啄木の母方の血脈 — 新資料「工藤家由緒系譜」に拠る—』^{註8)}などは、直接の石川家とは言えない親戚の家系を調べて本が出された実例である。その内容は母親の実家のことなので当然ながら、石川とは別の姓である。さらに小型の書籍ではあるが、啄木の両親に関する内容をまとめた『啄木の父と母』^{註9)}もある。

また彼の妻、旧姓・堀合節子の実弟であり、彼女の実家を継いだ堀合了輔は『啄木の妻 節子』^{註10)}という記録を残した。さらに妻、節子を主人公とする小説として『石川節子 愛の永遠を信じたく候』^{註11)}という文学作品さえ生み出されている。今回の『一握の砂』発刊100年目の催しで中心的な役割をされた石川啄木記念館の学芸員・山本玲子氏の筆になる『啄木の妻・節子』^{註12)}も注目に値する。

それだけでなく『一握の砂』に登場した一人の女性に注目して、1冊の書物を出版した事例さえある。『啄木と教師堀田秀子 — 「東海の小島」は八戸・撫嶋—』^{註13)}という新しい主張を含む調査結果をまとめた単行本である。さらに豆本の中には地元とのつながりにこだわった内容が少なくない。この関係で『釧路での啄木』^{註14)}や『釧路時代 啄木をめぐる女性たち』^{註15)}などが世に出されている。

一方、あまり知られてこなかった史実を丹念に掘りおこした「生誕百二十年・石川啄木外伝(1) 金田一春彦氏の中の啄木」^{註16)}などでは、金田一京助の子ではあるものの啄木とは面識のない春彦(はるひこ、1913-2004)の隠された思いや事件までが、後世のわたしたちに伝わってくる。

啄木を支えた人の中では必ずしも高名な文学者とはいいがたいけれども、近年その存在に注目される機会が多くなった郁雨・宮崎大四郎(いくう・みやざき だいしろう、1885-1962)という好人物がいる。郁雨自身は生

前に『函館の砂 —啄木の歌と私と—^{注17)}』と題した書物を出していた。いま手元にある版は、その復刻版だが昭和54年の書籍である。さらに函館における郁雨の後輩として親しく交わり、多くのことを教えられた阿部たつをは『新編 啄木と郁雨^{注18)}』や『啄木と函館^{注19)}』そして『ぶらや新書 第三十巻 啄木と郁雨^{注20)}』を編集・執筆した。

宮崎郁雨という人物の非凡な立派さを記述した労作として『啄木と郁雨 友情は不滅^{注21)}』を掲げておきたい。また小型本の一部に彼に関する記述が見られる『函館交友録』中の「宮崎郁雨翁^{注22)}」などもある。そして『一握の砂』発刊100年を迎えるに際して郁雨をとりあげた書籍が複数、世に送り出された。山下多恵子（やました たえこ、1953- ）の『啄木と郁雨 友の恋歌 矢ぐるまの花^{注23)}』などは、その中でも力作といえる。

また遊座昭吾（ゆうざ・しょうご、1927- ）の筆になる『なみだは重きものにしあるかな —啄木と郁雨—^{注24)}』が、『一握の砂』刊行100年目の日に合わせて出版された。遊座氏は啄木の父、一禎が明治20年から同38年まで第15代住職を務めた萬年山宝徳寺の子として昭和2年にその寺で生まれた。このような縁もあって日本文学の研究者としては、岩手県や盛岡そして洪民などと啄木のつながりを追っている。そのような氏の研究の視点は、既刊書『啄木と洪民^{注25)}』として公表されてきた。

IV. 啄木を研究する背景

石川啄木作品には詩、小説、評論など広範な文学の領域が含まれる。これらのほかに彼が記した書簡類と日記帳も重要な世界を構成するが、なんと言っても啄木は歌人であった。彼がものした短歌作品群は現代人にとって最も親しみやすく、そして理解しやすい口語形式の韻文である。このため石川啄木は最も有名な近代歌人と称することができる。

上記の通り石川啄木という文学者の魅力は、1点は理解しやすい短歌作品の作者という顔である。しかしながら他のもう1面は、実に「謎が多い近代人」ということにある。彼の年譜等が完備されているのにも関わらず、啄木本人と彼の周囲の人間には不思議な「謎」が存在している。その何よりの例が、虚偽の証言をしたり、うその内容を記述する人々が、啄木の身の回りに複数いたという事実である。

また周囲の人たちとは別に、啄木自身にも理解しがたい点が少なくない。彼は善良な人間なのか、悪人なのか、にわかには判断できない。もっと極言すれば、啄木は聡明なのか愚かなのか明言しがたいところさえ見られる。それほど石川啄木の経歴・私生活には、奇異な行動

が含まれている。

具体的に「嘘^{注26)}」を残した人物・実例のなかに、童謡詩人の雨情・野口英吉（うじょう・のぐち えいきち、1882-1945）が書き残している「あきらかな嘘^{注27)}」がある。おそらく若き日の啄木には、年長者から見て腹に据えかねる言葉や、目に余る行動が少なくなかったものと想像される。

さらに啄木の肉親である実妹・光子からも不思議な発言^{注28)}が飛び出しており、そのことで文学界は振り回されてきた。この騒動などは不愉快な醜聞と言ってもよい事件である。彼女が主張する内容は常識的でなく、真実とは考えられない。むしろ仮に史実であるのならば、なおさら実の妹が口にすべきことでない。逆に本当のことではないからこそ、軽々に口にすることができたのである。どちらにしても事実であるということ自体が成り立たない。発言は唐突で無意味で、最初から破綻をきたしている。しかし啄木の周囲に「不思議な人々」が存在した実例のひとつにはなる。やはり彼は謎の多い研究対象なのである。

重ねて石川啄木という人物は、理解しがたい「不思議な謎の多い歌人」だといえる。彼の作品がそのまま「理解し易い」点と比べると、全く反対に「わかりにくい人物像」という、研究者にとっては非常に魅力的な対象となっている。

V. 『一握の砂』発刊百年前後

彼の第一歌集である『一握の砂』が発刊された明治43年の百年後である平成22年の前後にはさまざまな動きがあった。それらの中でも彼が暮らした東北・盛岡と北海道における出来事を記述しておきたい。

小樽と石川啄木に関しては、近年において大きな発見があった。それは写真-3に示すような古写真の中に、啄木が勤務した小樽日報社の外観が確認されたことである。この発見により従来、啄木に対して想像されてきた点に大きな変化が生じた。

彼は明治40年（1907）9月27日から翌年（1908）の年頭1月19日まで北海道小樽市に居住した。その時に書簡の中で勤務先について、新たに設立された小樽日報社は新築物件で「立派なる事本道中一番」と記している。しかし後世に伝えられた同社跡地の写真には、木造2階建の小規模な集合住宅が写っているだけ^{注29)}であった。このため小樽の勤務先に関しても、啄木が自慢げな内容を友人に伝えたものであろうと考えられてきた。彼には日頃から事実以上に誇大な言い方をする傾向が、ほかの場面でもあったとみられているからである。

しかし今回、小樽市色内（いろない）2丁目1番20号



写真-1 渋谷の新詩社跡



写真-2 新詩社の説明文



写真-3 小樽港全景（小樽市総合博物館所蔵）

の小樽市総合博物館で、写真-3が確認された。写真中央やや上よりの比較的大きな2階建建築物は、小樽日報社の社屋であると考えられる。石川啄木は明治40年の秋から暮れにかけて、同日報社に勤務した。これまで当該社屋の実態を伝える正確な資料がなかった。したがってこの度の新発見は、日本近代文学史の研究にとっては見落とせない新発見である。それだけでなく小樽市にとっても、あるいは明治期の文化史研究全般にとっても大きな出来事であった。今回の出来事については、以下のよう
に報道された^{註29)}。

立派なる事本道中一番
啄木の手紙 本当だった
建物の新たな写真発見

写真-3は、現在の小樽駅の位置から稲穂町方面を撮影した全体像である。明治大正時代の小樽市街地を映し出した貴重な写真である。方位でいえば写真の上方向が、ほぼ真東の方向にあたる。ちなみに小樽港は、写真の左側斜め上の遠方に位置する。

制作された時代は必ずしも一致しないが、参考までにこの位置を示す古い図を3点ほど掲げる。図-2は吉田初三郎(よしだ はつさぶろう、1884-1955)の昭和11年12月30日の鳥瞰図である。吉田の門下であったが後に独立して最大のライバルともなった金子常光と友人・富仙の昭和4年8月25日の共作を図-3に示す。図-4に掲げる鳥瞰図が、研像なる絵師の筆になる作品である。いずれも旧小樽日報社跡付近における第二次世界大戦以前の賑わいを示している。なおどの鳥瞰図も当該地点を見る方向が、ほぼ写真-3とは逆側からである。

石川啄木が明治40年8月25日夜の函館大火でその土地を終われ、北門新報社への転職を目当てにして同年9月14日に小樽をへて来札した。その当時、札幌駅前では竣工後まもない赤煉瓦の商業施設が人々の耳目を集めていた。五番館と呼ばれた、札幌の市街地で有名な煉瓦造2階建の店舗建築である。当該建築物を示す図を、図-5に掲げる。この札幌市の鳥瞰図には、外観に赤煉瓦を顕(あらわ)にした旧五番館が描かれている。その場所は札幌駅のすぐ前に位置する。同図には豊平館、創生川、市役所、大通公園、北海道庁舎、北海道帝国大学農科大学附属植物園、札幌高等裁判所ほか図示されている。なお啄木が札幌時代に居住した下宿は、図のやや右側手前に見える札幌駅のすぐ右下であった。

この五番館は石川啄木の離札後は勿論、彼の没後もながら現役で商業活動を続けていた。それでも解体され、現在の施設は西武デパート札幌店として新築された。旧五番館のイメージを活かすため北海道江別産の赤煉瓦を大量に使用したデザインである。使用された煉瓦は、江別市元野幌の米澤煉瓦製であった。

しかし西武百貨店が同店舗の閉店を決定し、その後の展開は未定のままの状態であった。このため札幌駅前という重要な場所であるにもかかわらず、以降の都市開発を進めることが出来なかった^{註31)}。けれども平成23年の新年早々になって新たな動きが明らかとなった。旧札幌西武の土地と建物を家電量販店のヨドバシカメラが買収するという^{註32)}。それでもこの時点ではヨドバシカメラが駅前の一等地を購入することで決着がついたということしか明らかではなかった。したがって当該煉瓦仕上の店舗建築は当面そのままの状態経過するように受け取られた。

最新の報道によれば、さらに動きが早まる可能性がある。それは現在のヨドバシカメラマルチメディア札幌の店舗との関係で、同店舗を旧五番館跡へ移転する^{註33)}のであるが、新店舗の規模と駐車場整備計画を今後1~2年かけて決定するという。

VI. 『一握の砂』100年記念催し

本研修報告の主要部分である『『一握の砂』発刊百年記念パーティー』は平成22年12月1日(水)の18時より、岩手県盛岡市愛宕下1-10の盛岡グランドホテル地階において開催された。同集会の呼びかけは財団法人石川啄木記念館理事長嵯峨忠雄および同記念館館長菅原壽の両氏の名によってなされた。

盛岡グランドホテルの会場へはJR盛岡駅前からバスに乗車して「盛岡公民館前」バス停留所で下車する。同バス停からグランドホテルが建つ丘の上まで、徒歩でも数分間で到着。

1階を入ると通常のフロントとは別に特別に設けられたクロークがあり、季節柄オーバーやコートを預ける来場者たちの列が出来ていた。地下1階への広い階段を下りたところに同会の受付が設けられており、ここで当方の名を告げる。実は、その受付よりも前方で出迎えて下さった方がおられた。啄木研究者の中では余りにも有名な山本玲子、石川啄木記念館学芸員である。

受付を終えて広い会場内へと歩を進める。座席はすべて啄木作品にちなむ花の名がつけられた席である。浜薔薇(はまなす)など22の円形テーブルが設定されている。筆者は会場中央の苜蓿(うまごやし)と決められていた。この苜蓿のちのレッド・クローバーは、啄木が来道する契機となった函館の同人雑誌の名称でもあった。その苜蓿の席を写真-4に示す。会場の正面ステージ上には、写真-5のような啄木の写真が掲げられていた。

ほどなくして開会する。最初は山本太郎氏によるヴァイオリン演奏があり、その後で初めて開会の挨拶がなされた。次に大森健一氏による啄木作品の朗読。この短歌



図-2 小樽の鳥瞰図 (吉田初三郎)

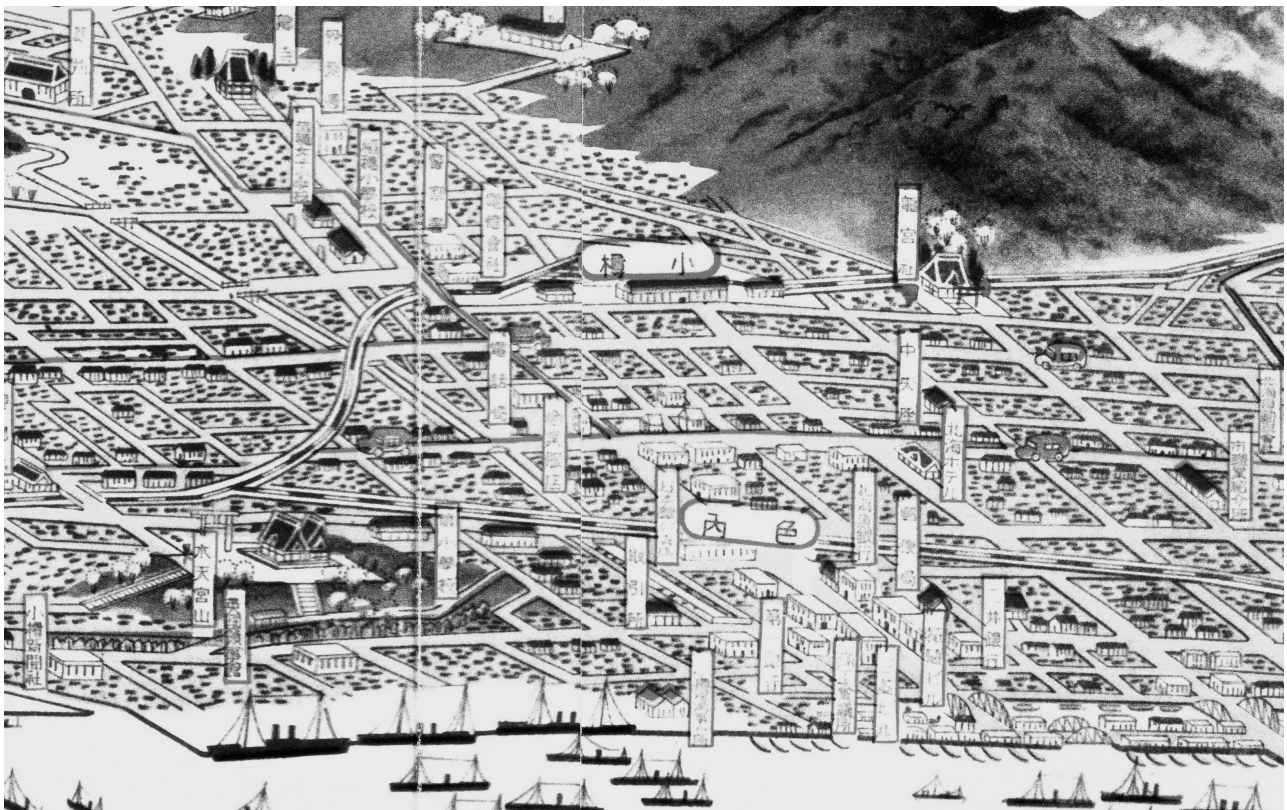


図-3 小樽の鳥瞰図 (金子常光と富仙)



写真-4 「一握の砂」100年



写真-5 会場のステージ右手



写真-6 「いのちなき砂の」

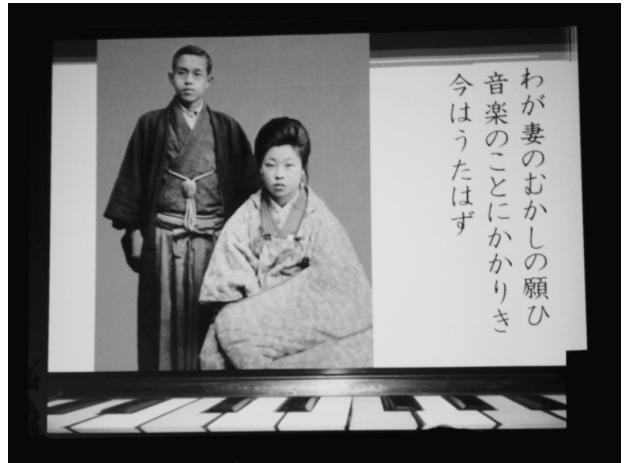


写真-7 「わが妻のむかしの願ひ」

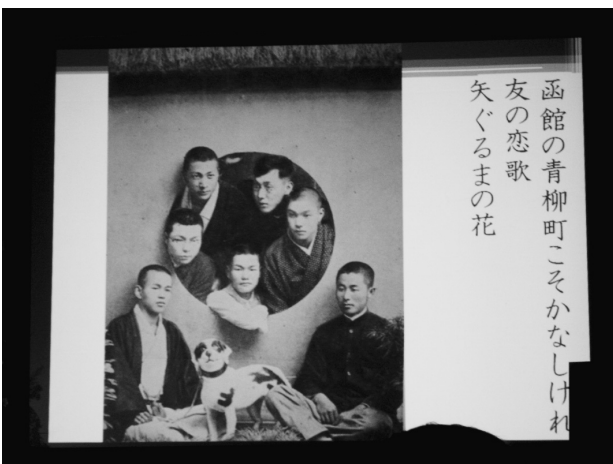


写真-8 「函館の青柳町こそ」



写真-9 下宿「蓋平館」



写真-10 旧渋民小と斉藤家



写真-11 旧斉藤家屋内の修理工事



写真-12 旧斉藤家の屋根葺き替え

朗読には映像が添えられていた。「東海の小島の磯の白砂に」に始まり、写真-6に示す「いのちなき砂のかなしさよ」、「わが妻のむかしの願ひ（写真-7参照）」、「ふるさとの山に向ひて」、「岩手山秋はふもとの」、「函館の青柳町こそかなしけれ（写真-8参照）」、「京橋の滝山町の新聞社」などの作品が朗読された。

つづいて生前の金田一京助が石川啄木にまつわる思い出を自ら語っている音声流される（写真-9参照）。その後は函館市長からの祝辞、ほかの祝電が披露され、啄木研究者の遊座昭吾氏による乾杯となり祝宴が始まる。後半には吉田真央氏によって新曲の披露があり、やがて閉会となる。吉田氏による曲は、啄木の「東海の小島の磯」をモチーフとした「白砂」という作品であった。なおこの集会に関する記事は、翌朝の地元紙に掲載された^{注34)}。

Ⅶ. 盛岡市内での新しい動き

『一握の砂』発刊百年記念パーティーで同席することができた建築関係者の方から、旧渋民村で保存されている啄木旧居・斉藤家の修理工事中であることを耳にした。このため急遽、翌12月2日に拝見させて頂いた。修理工事の内容は、ひとつは屋根を覆っている萱（かや）の葺き替え作業である。

しかし修理すべきは屋根だけではなく。旧斉藤家は宮城沖地震の影響を受けて、骨組にも大きな傾きが生じていた。この振れを今回、根本的に修正する工事が実施されていた。その修理工事の様子を写真-10から12に掲げる。写真-10は財団法人石川啄木記念館敷地内に移築保存されている旧渋民尋常高等小学校（写真左側）とその右側に並んで建つ旧斉藤家の正面（妻面）である。写真-11は旧斉藤家の屋内写真である。柱が傾いているので、その歪みを是正するために鎖やベルトに引っ張り力を加えているようすが理解できる。写真-12に掲載するのが斉藤家の屋根である。屋根葺き材料である萱を新しく取り替えたり、新材を追加したりして整える作業をしていた。

旧渋民地区ではなく、盛岡の中心市街地においても平成22年の秋季には歴史的な建造物に関する動きがあった。第33回全国町並みゼミ「盛岡大会」が平成22年11月5日（金）から11月7日（日）にかけて実施されたのである。

全国町並みゼミは昭和53年4月に第1回が愛知県内を会場として開催された。第1日目は名古屋市緑区の有松（ありまつ）という旧東海道に面した歴史的な町並みを会場として集會が持たれた。有松は「有松絞り」という木綿の染め物を生産していることで、現在でも知られて

いる。

その日の夕刻にはバスに乗車して愛知県東加茂（ひがしかも）郡足助町（あすけちょう）へと移動した。ここに分宿するための宿舎が設定されていた。現在では足助は豊田市内に編入されたが、かつて太平洋岸で得られた塩を信濃の国まで馬を使って運んだ「中馬（ちゅうま）街道」の中継点であった。中馬とは駄賃馬（だちんうま）つまり現金収入になる運送業を意味していたと伝えられる。

また一説では駄賃馬ではなく、手馬（てうま）がなまったものという所見もある。手馬とは、自家用の馬を意味するとのことである。中山道や東海道のように駅通に備えられた駄馬や伝馬が通る官道と異なり、自家用の馬が荷物の運搬をになったことによるとも言われる。

太平洋岸の塩の産地としては幡豆（はず）郡吉良町（きらちょう・吉良上野介の領地）や西尾（にしお・煮た塩）市などがあつた。一方、信州の送り先とは、塩尻（しおじり・塩の終着点）であつた。愛知県から長野県へ馬の背に乗せて塩の俵を運んだのであつたが、足助の地で塩の詰め替えをしたという。その際に地元で利益を生むように工夫をし、現在に至る歴史的な建造物を整備するだけの資金を得た。

筆者は、この第1回から参加し、翌年には滋賀県の近江八幡（おうみはちまん）市で開催された第2回全国町並みゼミにも参加した。第1回には東京大学建築史の稲垣栄三教授、京都大学都市計画の西山卯三名誉教授、奈良女子大学住居学の扇田信教授、日本大学理工学部都市計画の小嶋勝衛助教授、東京大学生産技術研究所第5部村松貞次郎研究室の時野谷茂大学院生（現・会津大学短期大学部産業情報学科教授・学科長）ほか全国から建築学研究者が集まった。地元からは中部工業大学農村建築の竹内芳太郎教授、名古屋工業大学建築史の城戸久名誉教授（当時・名城大学教授）、名古屋大学建築史の小寺武久助教授などが参加していた。

このように歴史を刻んできた全国的な組織が、岩手県盛岡市という伝統的な都市空間を開催地として第33回目の町並みゼミを行なった。その実行委員会の代表者が渡辺敏男氏であり、事務局は盛岡市都市整備部市街地整備課の下向均氏であった。下向均氏とは苜蓿のテーブルで同席し、渡辺氏には散会後に盛岡市内の歴史的建造物や第33回全国町並みゼミ「盛岡大会」会場を御案内いただいた。啄木と直接には繋がらない面もあろうが、彼のふるさと盛岡は新しい動きを始めていた。

Ⅷ. む す び

これまで記述してきたように歌集『一握の砂』が発行

されて100年が過ぎた。しかしその作品群は忘れられていない。昨今、啄木のふるさと盛岡・洪民や彼が1年間の月日を費やして歩いた北海道では新しい発見や建築物の保存活動が続いている。正確に100年目の夕刻には記念パーティーも、まさしく盛大に挙行された。

以下、啄木の作品に倣って100年目の実情を伝える目的で、簡明な韻文を記しておきたい。そのねらいは、ひとえに理解しやすい内容であることに尽きる。

ひやくねんめ
百年目
まず かしん
貧しき歌人、
よ しか
世は変わり
たか ひょうか
高き評価に
なに お
何を借しむや

ちもとせす
百歳過ぎ
だいいち かしゅう
第一歌集
はっこうび
発行日、
きみ こきょう
君が故郷に
ひとひとつと
人々集う

ひ
ありし日に
ゆ うたびと
逝きし歌人
したた
認めし
はな しょくざい
花と食材
うなび
こよい宴に

ひやくねんまえ
百年前
けん と きた
京都の北の
しおたみむら
洪民村、
いま もりおか
今や盛岡
たまやまくない
玉山区内

いっせい き
一世紀
いちあく すな
一握の砂
い つづ
生き続け
まだ忘れぬ
うた かず
歌の数かず

じゅう に がつ
十二月
しおたみむら
洪民村の
かや ぶ
茅葺きを
ふた しゅうり
再び修理
ひやくねんめ
百年目の朝

せいてん
晴天の
あおぞら もと
青空の下
こうじ
工事する、
やね はしら
屋根も柱も
たくほく なお
啄木 直す

あいちけん
愛知県
ありまつ あすけ
有松 足助で
はじ
始まりし
まちな
町並みゼミは
いま つづ
今なお続く

あいち
愛知から
おうみほちまん
近江八幡
れんめん
連綿と
つづ
続いたゼミは
もりおか
盛岡までも

みちのく
陸奥の
なんぶ みやこ
南部の都
ふる
古きまち、
ひとびとつと
人々集う
まちな
町並みゼミに

とうほく
東北の
もりおか
盛岡のまち、
たくほく
啄木と
まちな
町並みゼミで
ひとびとつと
人々集う

よみがえる
おたるにっぽう
小樽日報
しんぶんしゃ
新聞社
お お すがた
英雄しき姿
しまかん
書簡のままに

たくほく
啄木が
とも おく
友に送りし
て がみぶん
手紙文
つと しゃおく
勤めた社屋
あき
いま明らかに

付記

本研修に関しては、北翔大学北方圏学術情報センター「ポルト」の生涯学習研究部より研究費を受けた。本稿はその成果を報告したものである。また写真—3を掲載することをお許し下さった小樽市総合博物館に対して

も、心から感謝を申し上げる。そのほか先人の歴史的な研究成果に負うところが多大であった。あわせて深甚なる謝意を表すものである。

盛岡での今回の集いにおいては(有)〈盛岡〉設計同人の渡辺敏男代表取締役ならびに同事務所の脇田桂一郎氏、盛岡市都市整備部市街地整備課の下向均課長補佐に、ひとかたならぬお力添えを賜った。そして翌日の旧浜民村、斉藤家の修理工事見学に関しても特段の御配慮を賜った。

100年目当日は、財団法人石川啄木記念館の菅原壽館長ならびに山本玲子学芸員に終始ご指導をいただいた。また望外にも、道内から参加しておられた函館市文学館の森武館長とも再会することが出来た。末尾になってしまったが、この紙面を拝借して感謝の意を表する次第である。

注

- 注1) 石川啄木の年譜として、本稿で参照した文献を示す。岩城之徳：「啄木略年譜」、岩城之徳：『写真 作家伝叢書 3 石川啄木』、明治書院、昭和40年6月15日、PP.171-173
岩城之徳：「年譜」、石川啄木：『日本の詩歌 5 石川啄木』、中央公論社、昭和42年10月16日、PP.416-419
岩城之徳：「年譜」、桜田満：『現代日本文学アルバム 第4巻 石川啄木』、学習研究社、昭和49年8月15日、PP.221-228
岩城之徳：「略年譜」、岩城之徳：『新潮日本文学アルバム 6 石川啄木』、新潮社、1984年2月20日、PP.104-108
岩城之徳：「石川啄木年譜」、遊座昭吾・近藤典彦：『石川啄木入門』、思文閣出版、平成4年11月1日、PP.142-146
水野洋：「石川啄木一年譜」、上田博：『芸術・夢紀行 シリーズ4 石川啄木 啄木歌集カラーアルバム』、芳賀書店、1998年1月20日、PP.139-145
筑摩書房：「年譜」、『ちくま日本文学 033 石川啄木』、筑摩書房、2009年3月10日、PP.469-475
- 注2) 岩城之徳編：『回想の石川啄木』、八木書店、昭和42年6月20日
- 注3) 伊東圭一郎：『新編 人間啄木』、岩手日報社、昭和49年1月1日改訂版発行
- 注4) 金田一京助：『飛鳥新書 定本 石川啄木』、角川書店、昭和22年5月20日再版発行
- 注5) 石川正雄：『父啄木を語る』、三笠書房、昭和11

- 年 4 月 13 日
- 注 6) 吉田孤羊：『啄木を繞る人々』, 改造社, 昭和 4 年 5 月 10 日
- 注 7) 宮本吉次：『啄木の歌とそのモデル』, 新興音楽出版社, 昭和 16 年 10 月 5 日
- 注 8) 森義真・佐藤静子・北田まゆみ：『啄木の母方の血脈 — 新資料「工藤家由緒系譜」に拠る —』, 遊座昭吾, 2008 (平成 20) 年 < 戊子 > 8 月 7 日
- 注 9) 三留昭男：『緑の笛豆本・第 102 期第 405 集 啄木の父と母』, 緑の笛豆本の会, 平成 14 年 7 月 1 日
- 注 10) 堀合了輔：『啄木の妻 節子』, 洋々社, 昭和 49 年 5 月 5 日
- 注 11) 澤地久枝：『石川節子 愛の永遠を信じたく候』, 講談社, 1981 年 5 月 12 日
- 注 12) 山本玲子：『緑の笛豆本・第 74 期第 294 集 啄木の妻・節子』, 緑の笛豆本の会, 平成 5 年 4 月 1 日
- 注 13) 岩織政美：『啄木と教師堀田秀子 — 「東海の小島」は八戸・撫嶋 —』, 沖積舎, 平成 11 年 5 月 20 日
- 注 14) 鳥居省三：『えぞまつ豆本第 7 巻 釧路での啄木』, えぞまつ豆本の会, 昭和 52 年 12 月 10 日
- 注 15) 北畠立朴：『緑の笛豆本・第 77 期第 306 集 釧路時代 啄木をめぐる女性たち』, 緑の笛豆本の会, 平成 6 年 4 月 1 日
- 注 16) 西脇巽：「生誕百二十年・石川啄木外伝 (1) 金田一春彦氏の中の啄木」, 古館ゆたか：『青森文学 74 号』, 青森文学界, 2006 年 6 月, PP. 47-59
- 注 17) 宮崎郁雨：『函館の砂 — 啄木の歌と私と —』, 洋々社, 昭和 54 年 10 月 20 日
- 注 18) 阿部たつを：『新編 啄木と郁雨』, 洋々社, 昭和 54 年 10 月 20 日
- 注 19) 阿部たつを：『啄木と函館』, 幻洋社, 1988 年 6 月 10 日
- 注 20) 阿部たつを：『ぶらや新書 第三十巻 啄木と郁雨』, ぶらや新書刊行会, 昭和 42 年 12 月 15 日
- 注 21) 西脇巽：『啄木と郁雨 友情は不滅』, 青森文学界, 2005 年 3 月 20 日
- 注 22) 真崎宗次：「宮崎郁雨翁」, 真崎宗次『豆本 海峡 9 函館交友録』, 森屋, 昭和 57 年 3 月 21 日, PP. 17-25
- 注 23) 山下多恵子：『啄木と郁雨 友の恋歌 矢ぐるまの花』, 未知谷, 2010 年 9 月 15 日
- 注 24) 北海道新聞社：「啄木との友情世紀越え再現／郁雨連載「一握の砂」書評一冊に」, 『北海道新聞』北海道新聞社, 2010 年 (平成 22 年) 12 月 2 日, P
- 26。なお同書は桜出版より発行
- 注 25) 遊座昭吾：『啄木と洪民』, 八重岳書房, 昭和 54 年 7 月 30 日改定新版発行
- 注 26) 野口雨情：「札幌時代の石川啄木」, 『回想の石川啄木』岩城之徳編, 八木書店, 昭和 42 年 6 月 20 日, PP. 241-243
- 注 27) 西脇巽：『石川啄木の友人 京助, 雨情, 郁雨』, 同時代社, 2006 年 2 月 10 日, PP. 84-89
- 注 28) 三浦光子：『兄啄木の思い出』, 理論社, 1969 年 12 月第 7 刷, PP. 116-126
- 注 29) 荒木茂：『緑の笛豆本・第 71 期第 282 集 石川啄木と幻の歌人たち』, 緑の笛豆本の会, 平成 4 年 4 月 1 日の表紙写真には「旧小樽日報社の建物 (小樽市稲穂町六ノ八) 現在は普通の住宅」とある。
- 注 30) 北海道新聞社：「立派なる事本道中一番／啄木の手紙 本当だった／建物の新たな写真発見」, 『北海道新聞 (夕刊)』, 北海道新聞社, 2008 年 11 月 8 日, P-1
- 注 31) 北海道新聞社：「西武周辺 再開発を模索／札幌市、地権者と検討会」, 北海道新聞社『北海道新聞』2010 年 (平成 22 年 9 月 22 日)
- 注 32) 北海道新聞社：「旧札幌西武の売却合意／移転時期は不透明／駅前再開発と調整も」, 北海道新聞社：『北海道新聞』2011 年 (平成 23 年) 1 月 7 日 (金曜日), P-9
北海道新聞社：「変わる都心 sapporo／旧札幌西武売却／空き店舗解消に安堵／「赤れんが調」惜しむ声も」, 北海道新聞社：『北海道新聞』2011 年 (平成 23 年 1 月 7 日), P-25
- 注 33) 北海道新聞社：「旧西武 4 月にも解体着手／札幌・ヨドバシ／開業, 14 年以降の可能性」, 北海道新聞社『北海道新聞』2011 年 (平成 23 年 2 月 10 日)
- 注 34) 岩手日報社：「「一握の砂」100 年／啄木をしのぶ／盛岡でパーティー」, 『岩手日報』, 岩手日報社, 2010 年 (平成 22 年) 12 月 2 日 (木曜日), P-20

Hokkaido prefecture and Morioka city in 2010 : “Ichiaku no suna” printed 100 years ago

Shintaro Mizuno (Hokusho University)

Abstract

This paper is the induction report on the party of “Ichiaku no suna” printed 100 years ago. “Ichiaku no suna” means the sand of a handful. “Ichiaku no suna” has been printed in one December 1910. “Ichiaku no suna” is famous Tanka(poem) book. “Ichiaku no suna” was wrote by Takuboku Ishikawa (1886–1912). Takuboku Ishikawa was born in Iwate prefecture 1886. He wrote another anthology “akogare(dreams)”.

This paper writes on town planning in Morioka city, Iwate prefecture. And Otaru, Sapporo city in Hokkado prefecture was wrote this paper.

Key words : Takuboku Ishikawa, Otaru, Sapporo, Shibutami, Town Plannning, the Seminar of a row of houses along the street in Japan